東日本大震災被災地における
第４回ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

報告の第二部

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副会長

６月１３日　（火曜日）

早朝、車で陸前高田を経て気仙沼にいきました。大被害があった町なので、気仙沼のボランティア・センターは今でも週に７日間開いています。今でも、いろいろなボランティア・センターがあります。昨年のように、私たちは気仙沼復興協会（ＫＲＡ）のボランティア・センターに志願しました。ＮＰＯの機構については、第４回ボランティア活動報告を見てください。

スタッフは我々に畑の清掃を分担しました。車で波路杉ノ下地区に行って、雑草の生い茂った畑の 土を掘り返しました。雑草を根こそぎ引きながら、小石を拾っていました。粘土質の農地だったので、大変な仕事でした。しかし、石はあまりありませんでした。

昼ご飯に、高さ１５メートルの丘にある杉ノ下地区の慰霊碑にお参りをしました。杉ノ下地区で一番高い丘なので、たくさんの人がその指定避難場所に逃げましたが、津波の高さは１８．１５メートルで、多くの人が犠牲になりました。

気仙沼市の杉ノ下地区の住民３１２人のうち９５名が亡くなったそうです。
家族全員を亡くした世帯は１０を数えます。
２０１２年７月に、遺族らの面前で 慰霊碑の除幕式がありました。碑文を読むと、涙が浮かんで来ました。

「　　絆
あなたを忘れない
「ここに居れば大丈夫だ」
しかし、無常にも第一波で
下手から家や車が押し寄せ
そして、第二波、第三波が・・
九十三名の尊い命と
すべての財産が海へと散った
あの一声が無上の叫びに
私たちはあなたを忘れない
いままでありがとう
　　こころやすらかに
　　杉ノ下地区民一同」

その丘から辺りに目を走らせると、胸が苦しかったです。
丘の麓に悪臭のするゴミ捨て場がありました。

また一方には焼却器が見えました。
焼却器の前には、海に近く土地を約１０メートル高くするために、土が盛られています。

その後で、妻と私は他の近くにある記念の場所に行きました。

明治時代の津波で、海沿いの集落が流されたときに、海から少し離れたところに新しい集落が生れたそうです。そのときに、そこに３５本の杉の木を植えました。ところが、２０１１年の震災でその杉の木のところまで水が来て、木が全部立ち枯れてしまったのだそうです。３４本の枯れた杉の木は伐採されましたが、一本は倒されませんでした。
その１本を、モニュメントとして残そうということで、熊野のチェーンソーアーティストの方が来て、昇る龍を掘ったのだそうです。
その昇龍は犠牲になった方々の魂を空へ昇らせる意味があります。このモニュメントの付近に若木が植えられています。これも「気仙沼復興のシンボル」だと思います。
ちなみに、住民は竜に味方してもらわないと、農業も漁業 もかもうまくいかないと思っているそうです。

仕事後、KRA のボランティア・センターに帰って、に気仙沼の復興の現状を尋ねました。
今まで、９０ヶ所で、約７６００人の気仙沼市民が洞仮設住宅で住んでいます。
３３００の世帯です。しかし、数人が 洞仮設住宅を引き払いたいといっています。

未来の津波被害を予防するために、宮城県は防潮堤を建てることを決議しました。
それに、いろいろな場所で土地が５メートルかさ上げされています。
いまでもやはり、たくさんの地域住民がその防潮堤に疑問を持っています。特に、漁師と観光で、生活する人々は徹底的に反対しています。しかし、防潮堤の正確な立地と高さ（７．０～９．８メートル）しか論議されません。

５月１５日　（水曜日）

今日、陸前高田に行って、ボランティア活動をしました。これまでの陸前高田のボランティアセンターが昨年末に活動を終了しましたが、陸前高田市の社会福祉協議会の決定に従って, その代わりに新しい NPO が「陸前高田市復興サポートステーション」を開きました。本当に迅速かつ効率的に働いているサポートステーションが毎日開かれています。
着くと、サポートセンターはにぎやかでした。なかんずく、神戸から来たマツダ会社のボランティアが２台の大型バスで来ました。

手続きは前のボランティアセンターとほとんど変わりませんでした。我々は二つのグループに分けられました。一つは綿花を畑に移植する作業に，もう一つは漁業関係の作業でした。

センターを出発する時にセンターのみなさんが出口に立って「いってらっしゃい」と手を振ってくれるのも同じでした。

*　１つ目の班は広田町後花見（ひろたちょううしろはなかい）に行って、海岸の近くにある津波の被害のあった畑では綿花を移植していました。

土壌除塩・プロジェクトなので、綿花は陸前高田市から依頼されました。

２０１１年３月、東日本大震災の津波により、岩手県・宮城県・福島県の被災３県合わせて、およそ約２万ヘクタールもの田畑に海水が浸入し、塩害の被害を受けました。綿花は、成長の過程で土壌の塩分を吸収する性質を持ちます。今まで、いろいろな被災地で除塩に成功した例が報告されています。

米は、塩分濃度０．２％以下の土壌でしか栽培できません。津波で被災した土壌塩分濃度は０．８～１．２％にまで上昇しましたが、半年たって０．５％ほどに下がりました。約２年綿花の栽培を続けると、水稲作付けが可能な状態に戻ると予想されています。

*　２つ目の班は漁港に行きました。彼らは３年間海中に吊ってあった牡蠣から付着物を除去しました。とても汚れる作業なので、ゴム手袋とエプロンを装着しなければなりませんでした。仕事後、牡蠣はまた海中に降ろされました。

廣瀬芙美子さん

村瀬靖昌さん

午後に、大船渡市役所に行き、市長の戸田公明氏とこの一年半で４度目の会見しました（最初の会見は２０１１年９月、二度目は２０１２年４月、三度目は２０１２年１０月でした）。

２０１１年７月に新しい大船渡地区の土地利用方針図が出来ました。私は「第２回ボランティア活動報告」に詳しく報告しました。新しい「津波線」から見て 、海側には絶対に人間が住んではいけません。しかし、職場としては低地でも可能です。

戸田氏は、まず損害の程度と復興についての最新のデータを伝えてくれました。５５１５所帯は建物被害を被り、全壊は２７８４棟、大規模半壊は４３０棟、半壊は７１７棟です。一部損壊は１２１０棟に上りました。

現在、２５８の復興プロジェクトがあります。１０パーセントのプロジェクト（＝２７事業）はすでに実施されて，６９パーセント（＝１７８事業）は着手されて、１２パーセント（＝３２事業）は計画中であります。

約１５００棟の建物が再建されなければなりません。しかし、６００人の津波で被災した土地所有者がまた危険地帯にある私有地に新しい自宅を建てたいと言っています。民有の地所なので、国家的行動の自由裁量の余地には限りがあります。
高台へ移り住むことを薦めています。経済的な面からも人々に高台への移住を促すように、確実な敷地で新しい家を建てる人々にだけ政府からの支援を受けることができるそうです。

大地震から２年たちましたが、今もたくさんの人々が仮設住宅に住んでいます。３７ヵ所１８０１戸が使用されています。仮設住宅では約２５００人の居住者がいますが、正確な数はわかりません。二、三年の間に、すべての仮設住宅を閉めることが予定されています。
小高い市街化区域では、約１０００人が新しく自分の家を建てたいと言っています。そして、約１５００人が公営住宅に住みたいと言っています。
自分の家を建てると、一切を失った市民は１５００万円（約１２万ユーロ）の復興交付金を受けられます。
しかし、この二つの可能性のうちのいずれかを選ぶことは多くの人々にとって、あまりにも難しすぎる選択です。それで、大船渡市はこの計画の実施が難しいと思っています。

現時点は、約６５０棟の家が小高い所に 建てられるそうです。そのために、５０ヵ所の小高い区域の市街化が予定されています。 国有地または私有地 です。現在はまだ不十分で、１１ヵ所足りません。

小高い市街化区域　（□ = 公営住宅建設、　○ = 自宅建設）

商業地域と工業地域については、目に見えて進歩して来ました。去年の秋と比べて、

船渡市、２０１３年の春（大地震の２年後）

いくつかチェーンストアが建てられました。そして、新しい魚市場が建築中です。しかし、復興のための工事は　緊急なものを一時的に行うことが多く、本格的は再建設には、まだ３、４年かかるそうです。

新しいメディア・ストア

新しい魚市場（建築中）

水防については、二つの防波堤を建てることが予定されています。震災で全壊した大船渡港の湾口防波堤が国家の資金で復旧されています（２０１２年６月に、大船渡市漁協はその国の防波堤復旧工事を承諾することを賛成多数で決めました）。現在、湾口防波堤は工事中で、２０１５年度内の完成を目指しています。
そして、岩手県の指示に従って、岸辺に高さは７メートルか１４メートルの防潮堤が市の資金で建てられます。離岸堤はまだ計画の段階です。

５月１６日　（木曜日）

今日は、広田湾から約２キロ内陸にある陸前高田市気仙町に住んでいる佐藤直志（さとう・なおし）さん（７９）に会って、復活への田植えに参加しました。

その活動へのきっかけは、我々に感銘を与えたドキュメンタリー映画『先祖になる』でした。東北では撮った『先祖になる』は、今年のベルリン映画祭で上映されました。大震災から１月後に、映画監督の池谷薫さんは陸前高田を訪れました。そこでひとりの老人の佐藤さんと運命的な出会いを果たしました。
震災で消防団員である長男を亡くされたにもかかわらず、老人は災害地を引き払わずに、必死で頑張って、まだ半 壊された家に住み続けました。たゆまない努力で立木をたくさん倒し、１年半以内に同じところに新しい家を建てました。その事について、池谷薫はドキュメンタリー映画を撮りました。
長年「ベルリン映画祭のフォーラム部門」のフリー･スタッフとして、手伝っている福沢先生のおかげで、佐藤さんと知り合うことができました。悲劇を跳ね返して生きる佐藤さんの生き様に感動し、彼に会えて本当にうれしかったです。

まず、もう一度陸前高田市復興サポートステーションに行き、ゴム手袋とゴム長靴を借りました。そして、被災地の中にある田んぼに行きました。挨拶すると、佐藤さんが「田植は復興の第一歩だね。ドイツから参加とはうれしい。」と言ってくれました。がれきだらけ田では、今年３月に１年がかりの復旧工事を終えました。津

波の前と同じように、ここに栽培された米からお酒を醸造することが予定されています。蔵元の　「酔仙酒造」と呼ばれる造り酒屋の酒蔵は、津波で全壊して、７人の社員が犠牲になりました。生き残った社員が刈り入れの後で「陸前高田の復興のお酒」を造りたいといっています。

佐藤さんと共に映画に登場する地元区長の菅野剛（かんの・たけし）さん（６３）も出席していました。彼はみんなに「小さなことをコツコツやって日常を取り戻さないと。田植えもでき、元の生活が戻せ始めている。一歩ずつだが、復興を実感している。」と語りました。

佐藤さん（右の写真）が我々に慣れた手つきで田植えの要領を教えてくれた後で、みんなは裸足で田んぼに入りました。

約２５人のボランティアの人たちが地元の住民や蔵元の「酔仙酒造」の社員と一緒に働きました。

佐藤さん

去年の秋に足にけがをした私だけは、ゴム長靴で働きました。ドロが長靴にくっ付き、ちょっと難しかったですが、楽しくて面白い仕事でした。

昼休みに、丘の中腹にある泉増寺の庭に行きました。そこから新しい田んぼがよく見えます。写真の後ろには、海に近く土地を１０メートル高くするために、土が盛られています。

「酔仙酒造」造り酒屋の招待で、美味しい昼食をいただきながら、談笑しました。
あんこ餅、おにぎり、豚汁などのごちそうが出ました。
フラウケさんは日本語で「古里」とドイツ語で「Heideröslein（野ばら）」を歌いました。明るい気分一杯で　「酔仙 Rise up KESEN 純米原酒」という“復興のお酒”を飲みました。
　「酔仙」を作っている酒造場は陸前高田にあります。
しかし、陸前高田市の復興計画作りの遅れなどの複雑な事情が絡まり合ったために、北隣の大船渡市の高台に新しい蔵が建てられました。

我々は佐藤さんにピン付きの記章をプレゼントしました。その後で、地元区長の菅野剛さんの案内で、佐藤さんの家を訪問しました。

佐藤さんの新しい家

ほかの再建中の自宅

現在、仮設住宅で暮らす住民は新しい自宅を建てています。たとえば、菅野さんも現在再建中の自宅が夏までには完成します。
菅野剛さんのように、みんな一緒に働いてきたので、コミュニティーの中で協力の精神と団結力が大きくなってきたそうです。

午後は近くの畑で小石を取り除く作業をしました。こぶし大の石がごろごろしていました。

夕方は、２０１１年から４度目に立根町の皆さんとの日独の交流会がありました。いろいろな知り合いに再会できてうれしかったです。そして、新しい人たちとも何人か知り合うことができました。

立根町の皆さんは日本の歌と踊りを上演しました。そして、フラウケさんは日本語とドイツ語で歌を歌って、最後に、妻とヤーナとフラウケはカラオケで歌いました。

５月１７日　（金曜日）

今日は早く起きて、朝６時に大船渡の魚市場に行きました。魚市場はだれでも入ることができました。
ですから、我々は、いろいろなところを見学することができました。二階はまだ半壊ですが、一階は市場として機能していました。７時に、魚を積んだ大型の船が港に戻ってくると、魚市場はすぐにぎやかになりました。

大きな網で魚をすくって、コンテナー状の容器に入れました。そこから魚がベルトコンベヤーに載って運ばれ、それらを両側に陣取った仕分け人たちが魚の種類と大きさによって分け、樽の中に放り込み、すぐせりに出しました。

漁港内の食堂でおいしい朝食を取った後、大船渡市赤碕町にある蛸ノ浦小学校に行って、佐々木貞子校長先生を訪問しました。

近くにある赤崎小学校は津波で全壊したので、蛸ノ浦小学校が全校生徒と先生を受け入れました。去年、我々はベルリンのジョン・Ｆ・ケネディー小学校からの義援金２０万円を生赤崎小学校の生徒代表に渡しました。その義援金で、学校は子供たちの希望を聞き「よさこい半纏（はんてん）」を買いました。
佐々木校長先生は学校の現状について報告してくれました。残念ながら、昔とほとんど変わっていないそうです。今でもたくさんの被災した子供たちがいろいろなことをひどく心配しているそうです。症候は寝小便や悪夢、不安状態などです。しかし、生徒は全員毎日小学校に登校しています。

教室はまだ狭くて窮屈です。現在新しい校舎の復興計画ができていますが、建設仕事が多いの工期が約３年間に延びるそうです。

運動器具（ボールなど）について、寄付がまだ必要なので、絆・ベルリンはドイツからの支援についての可能性を探すことを約束しました。７月初めに、絆・ベルリンの「友の会」が１７万円を寄付しました。

。。。。。。。。。。。。

午後には、長洞仮設住宅に行きました。まず、仮設住宅の団地の友結ファーム（菜園）で、働きました。

１つの班は小さな鎌で草を刈りました。その仕事が終わると、彼らは公民館・絆コンサートを聴きに行きました。
もう一つの班は会長の阿部さんと一緒にビニールハウスの枠組みを組み立てました。

絆・演奏会は長洞仮設住宅団地の新しい公民館で催されました。フラウケさんが歌い、クラウスさんがフルートを吹きました。団地に住んでいる熊谷さんが電子ピアノで伴奏をしました。

最後、皆と一緒に「古里」を歌いました。すべての人にとって気持ちがいい日だったと思います。

歌手も音楽家も盛んな拍手を受けました。演奏会が終ってから、さらに茶菓が出されました。お菓子を食べながら、みんなは活発な会話を交わしました。

５月１８日　（土曜日）

今日は、絆・メンバーは二つに分かれました。１つの班は大船渡のボランティアセンターに行って、畑の清掃を分担しました。

もう一つの班は早く起きて、「翼」プロジェクトの参加者募集のため、遠野に行きました。「絆・ベルリン」は今年８月に岩手県から５人の高校生をベルリンに招待します。被災地を離れて、ドイツ社会を体験し、同世代の若者と１週間過ごし、異文化経験をすることによって、将来の地域復興・活性化に役立たせてほしいと願うからです。

２０１１年９月、我々は少しでも復興作業の手伝いをするために、はじめて三陸海岸を訪れました。同時に、津波が日常生活に及ぼした影響について知りたいと思っていました。そのため、いろいろな幼稚園や学校、老人ホームなどを訪問しました。その時、大船渡高校の校長先生とお話をしました。高校生と交流会をすると、たくさんの高校生が交換留学に関心を持ち、外国を知りたいと言っていました。
ドイツへ帰り、私たちの間で高校生招待の計画が持ち上がりました。しかし、高校に尋ねると、肯定的な答えは得られませんでした。
日本でのパートナーを見つけることは本当に難しかったですが、今年１月にＴＭＮが協力してくれることになりました。３月に、「ロベルト・ボッシュ財団」に助成金を申請しました。同時に平行して、ＴＭＮが４月初めに岩手県のメディアを使って，公募を開始しました。
３月末に、「ロベルト・ボッシュ財団」は翼・プロジェクトに１万ユーロの助成を約束してくれました
４月２５日の応募申込期限の後で、ＴＭＮが１次審査（書類審査）しました。２５人が応募し、１４人の女子高校生と６人の男子高校生が書類選考で選ばれました。今日は２次審査の日でした。我々はＴＭＮと一緒にこの２０人の中から５人が選ばなければなりませんでした。本当に、一番難しい選択でした！

面接場所は遠野市の市民サービスセンターにあります。面接は９時４５分に始まりました。

面接官のメンバーは下記の通りです:
TMN の理事長の多田さんと理事の臼澤さん、プロジェクト・マネージャーの及川さん、さらに日向さんが参加しました。絆・ベルリンからの面接者は、会長の福沢先生とフランク・バイヤー、ヤーナ、私の妻　そして、私（副会長）でした。
遠野の教育委員会から村上さんも立ち会いました。それに通訳として頼子さんが参加しました。
面接者の２０人はそれぞれ１５分間の面接を受けました。

それぞれの面接の後、私たちはひとりひとり数字で評価しました。１は合格、２は保留、３は不合格です。しばしば、この決定は本当に難しかったです。
自己紹介の後で、福沢先生がモティベーションなどについての質問しました。最後の３分間にヤーナが英語で簡単な質問をした。多くの生徒にとっては、英語が大問題でした。多田さんによると農業高校では英語の授業があまりないそうです。

約７時間後に、４人の女子高校生と１人の男子高校生が選ばれました。２０人の応募者の中から５人を選ばなければならなかったので、ハードな一日でした。

その５人の高校生は今年の８月６日から１４日までベルリンを訪問します。重点はドイツ人の高校生との交流です。ドイツ人家庭での６日間ホームステイと高校訪問、２泊３日のワークキャンプが予定されています。パイロット・プロジェクトが うまくいけば、今後４年間は継続していく予定です。
「翼」の主催は 絆・ベルリンで、共催はＮＰＯ法人 ＴＭＮで、さらに後援は 岩手県教育委員会と駐独日本大使館、 ベルリン独日協会です。

・・・・

面接が終わると、大船渡市の福祉の里センターに行って、三度目のお別れ会を催しました。
ＴＭＮのメンバーや長洞仮設住宅の居住者、大船渡ボランティアセンターのメンバー、大船渡に住んでいる支援者などが絆・ベルリンの招待で来ました。
福沢先生と私は開会の挨拶をしました。山田ボヒネック頼子さんは同時通訳をしてくれました。挨拶後に、皆と一緒に乾杯しました。食べながら、歓談しました。フラウケさんとクラウスさんが、演奏してくれました、ＴＭＮの及川さんと日本のボランティア人、長洞仮設住宅の居住者からも、お別れの言葉を頂きました。そして、皆で輪になって合唱しました。私たちは深く感動しました。

最上さんのお別れの言葉

４回目のボランティア活動を通じて日本とドイツの友情の絆がさらに強まったと思います。最後に、別れの握手をし、互いに抱き合いました。また、東北に来ようと思いました。

お別れ会の後で「絆」メンバー全員が男性ボランティアの部屋に集まり、最後のミーティングをしました。第４回のボランティア活動に参加できて本当によかったとそれぞれが感想を述べました。

今度のボランティア活動を回想し、村松庄次郎さんが右記の詩を読まれました。

なみだする
わかれるとものの
さびしさは
たのしいおもいで
あればあるほど

こんなに充実した９日間を過ごせて幸せだと、発言が続きました。たくさん貴重な経験をしました。去年地鎮祭を行った場所である、９ヶ月後に完了した公民館でコンサートを開催しました。
２０１１年の秋はどちらを向いても、たくさんの瓦礫が山のように積み重ねられていました。１年半後、その同じ場所で田植えをした私たちの心は希望で満たされていました。本当に喜ばしく印象的な体験でした。みんなもう一度東北へ行きたいと思っています。

５月１９日以降

今日グループは解散しました。朝早く、みんなと別れました。

妻と私は遠野を経て弘前に行きました。５月２０日に、遠野市立博物館と遠野昔話資料館では、カンナガラ・プロジェクトのために、しし踊りについて調べました。
５月２２日に、弘前大学教育学部の北原啓司教授と待ち合わせて、「絆・ベルリン」について詳細に報告しました。
北原教授は、公益社団法人日本都市計画学会防災・復興問題研究特別委員会復興まちづくり部会長で、大船渡などでの復興まちづくりの支援を進めています。

８人の絆・メンバーたちは福島県を経て東京方向に向かいました。東京に帰る途中で、８人の絆・メンバーたちは福島第一原発の近くにある「希望の牧場」を訪問しました。

５月２４日に、市川市の復興支援チャリティコンサートではフラウケがシューベルトの「野バラ」を歌いました。
６月７日に福沢先生は桜美林大学東アジア研究会にて「絆・ベルリン」の活動を報告しました。

フランク・ブローゼ (Dr. Frank Brose)

ベルリン、　２０１３年７月

参加者･リスト

１．ヨーロッパに住んでいる絆のメンバーたち

名前	職業	国籍	参加回数
Frank Beyer	元会社マネージャー	ドイツ人	２
Dr. Frank Brose	地質学者	ドイツ人	４（副団長）
Dr. 福沢啓臣	元ベルリン自由大学日本学准教授	日本人	４（団長）
Anna Hesse	職員　（在ドイツ日本大使館）	ドイツ人	１
Brigitte Jogschies-Brose	ソーシャルワーカー	ドイツ人	４
Jana Riedel	プロジェクト・マネージャー（ベルリン・ターフェル）	ドイツ人	２
Klaus Rupprecht	翻訳家	ドイツ人	２
Claus Schnarrenberger	元ベルリン自由大学教授	ドイツ人	２
Frauke Twork	元オペラ歌手	ドイツ人	１
Dr.山田ボヒネック頼子	元ベルリン自由大学日本学准教授、ＮＰＯヨーロッパ日本語教育学研究所代表	日本人	３

２．日本に住んでいる絆のメンバーたち

廣瀬芙美子	元職員、年金生活者	日本人	４
村松庄次郎	元会社員、年金生活者	日本人	４
村瀬靖昌	翻訳家	日本人	３
戸谷美津子	フリーライター	日本人	２
石井清秀	芸術家、民生委員	日本人	２
土屋恵子	フリーライター	日本人	１

３．大船渡に住んでいる

今野みつこ	介護・ソーシャルワーカー	日本人	４
今野定志	民生委員、年金者	日本人	４